



悪条件の下で育った竹こそ
尺八の素材となる

遠藤さんの仕事場は、
竹を保護するため
北側に作られている。

ら三尺管まで。自然の素材なので梅雨時や乾燥期には湿度調節が欠かせませんが、きちんとメンテナンスすれば50年はおろか100年、200年は十分使えますよ」とのこと。

尺八の素材である真竹は、節目の間隔や肉質、根元の具合などで選ばれ、採取されるが、「いい土壌で育った竹は育ちすぎてしまうので、寒暖の差が激しく、できれば下に岩盤があるような、悪条件の所で育った竹のほうがいいんです。よく竹は天に向かって真っすぐに伸びているといわれますが、実は大半がひねくれものですね(笑)。太さや硬さ、肉質、節の間隔のバランスと、すべての条件を備えた竹はたいへん稀なんです」

掘り出した竹を火であぶり「油抜き」した後、2週間ほど天日で干し、それを3年以上自然乾燥させてから制作にとりかかる。

「その間に竹の中の水分が飛んで材質が硬くなり、表面になんともいえない自然の色あいが出てくる。材質が安定するまでには最低でもそのくらいの時間が

王 伝統の手技

第二十回

太さ、硬さ、節の間隔……
すべての条件に恵まれた竹は
稀という中で、
尺八として竹に命を吹き込む
遠藤 晏弘さん。

竹林の風に愛でられたような音色。3年の月日を経て、職人の技によって尺八に生まれ変わる竹。そこにはすでに1300年の歴史が刻まれている。

文/山川敦司 撮影/荻谷真紀



竹のように真っすぐは嘘。
大半の竹はひねくれ物だ。

額にうつすらと汗をにじませながら、乾いたあぜ道を足早に歩く一人の侍。やがて、ざわめく枯れ草の彼方から地を這うような尺八の音が聞こえてくる。その響きはしだいに重なりあひ、颯々とあたりの静寂を包み込む。

と、侍の眼前に陽炎のように浮かび上がる虚無僧の一人。彼らは天蓋と呼ばれる深編み笠をかぶり、首からは袈裟と食箱というおなじみのスタイル。歩調を合わせながら近づく両者の間にはすさまじい殺気が漂い、尺八の音がやむと同時に編笠が宙に舞う。そう、虚無僧集団は侍を狙う刺客だったのだ――。

ご存知、時代劇でおなじみのワンシーンだが、虚無僧と尺八との間には深い関わりがあったという。

尺八は、中国・唐の時代を起源に奈良時代に日本に伝わり、雅楽で管楽器として使われたとされる。ただ、平安期には静かな響きゆえに、雅楽から外され表舞台に返り咲いたのは江戸時代に入ってから。その役割を担ったのが虚無僧だった。

「虚無僧は、禅宗の一派である普化宗のお坊さんでしたが、その実は浪人者がほとんどで、尺八を吹いて米銭を乞いながら諸国を行脚していました。彼らにはさまざまな特権が与えられていて、そのひとつが尺八を吹くことだった。ですから彼らにとって尺八は楽器ではなく、法器、つまり、宗教で使う神聖な道具だったというわけです」

そう教えてくれたのは大正元年の創業以来、尺八を作って100年という「遠藤晏弘尺八工房」の三代目である遠藤晏弘さんだ。

◇

夏日を思わせるような初秋の昼下がり。東京・練馬区にある工房を訪ねると、「竹を保護するため」日の当たらない北側に作られた六畳の仕事場には壁一面に大小異なる見事な尺八がズラリ。

「数ですか？ うーん、数えたことないからわからないなあ……」

そう微笑する遠藤さんは、この道40年の尺八制管師だ。「うちで扱う尺八は一尺二寸か

【尺八製作の工程】



④歌口に水牛の角を入れる。



②切断する中継ぎ部分に目印を入れる。



③中継ぎ部分を鋸で切る。



⑥ドリルで「指穴」を空ける。



⑦トノコと漆を混ぜた下地を作る。



⑧トノコと混ぜ合わせた漆を木ペラを使って内側に塗っていく。2分割した尺八をつなぎ、試し吹きをして音を調節する。



製作中の尺八。

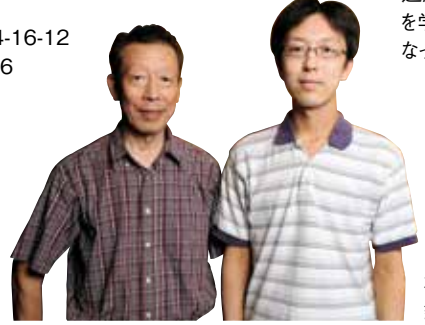
遠藤晏弘 Endo Yasuhiro

1948(昭和23)年、静岡県生まれ。本名・遠藤英行。役所勤めをしていた祖父・金六(初代晏弘)が、近所の尺八製作所の手伝いをしながら技術を習得し、1912(大正元)年に遠藤晏弘尺八工房を創業。父・周が二代目となり技術を継承。本人は「将来はサラリーマンに」という母の思いもあり、芝浦工業大学で電子工学を学ぶ。だが、理論と計算だけの授業は退屈で「技術的なことを学ぶためには、早いほうがいい」と在学中に弟子入りを決意。23歳で卒業と同時に父親に師事。工房に工作機械を入れるなど徐々に自分流のスタイルを確立し、1987(昭和62)年に「三代目晏弘」となる。尺八制管師として多忙な日々を送る一方、5年前からは都立練馬高校で尺八製作の講師として生徒たちに竹の魅力伝えていく。なお、四代目の三男・鈴匠は、尺八制管師としてだけでなく、尺八奏者としても活躍している。

遠藤晏弘尺八工房
東京都練馬区早宮4-16-12
TEL:03-3992-3426



遠藤さんは大学で電子工学を学んだ後、尺八制管師となった。



右は三男で四代目の鈴匠さん。

「尺八は、同じものを使っても吹く人によって音色に差が出る。その裾野を広げている。」

「尺八は、同じものを使っても吹く人によって音色に差が出る。その裾野を広げている。」

「尺八は、同じものを使っても吹く人によって音色に差が出る。その裾野を広げている。」

「職人はこれまでその尊い歳月を経験と勘という曖昧なものに任せてきました。でも。その中には数値化できるものもあつたはずなんです。だったら、目で見える形で後世に受け継いでも

「職人はこれまでその尊い歳月を経験と勘という曖昧なものに任せてきました。でも。その中には数値化できるものもあつたはずなんです。だったら、目で見える形で後世に受け継いでも

「職人はこれまでその尊い歳月を経験と勘という曖昧なものに任せてきました。でも。その中には数値化できるものもあつたはずなんです。だったら、目で見える形で後世に受け継いでも

尺八の奏法

尺八は歌口と呼ばれる口形に唇を当て、吹き込む空気を調節しながらそれを音に変える楽器で、音程を変える指穴(孔)は全部で5個。唇と歌口の距離と、穴の開閉を組み合わせることにより音程を変化させる。音高(音程)を下げることを「メリ」、上げることを「カリ」、顎の上下動を縦ユリ、首を横に振る動作を「横ユリ」と呼び、これがピブラート効果を生み出す。また2つの音を滑らかに繋ぐ「スリ」という奏法のほか、激しい感情を表すときには息を大きく混ぜる「むら息」、鶴の声を真似するときには、舌や喉を利用する「玉音」という奏法が用いられる。



5個の指穴(孔)の開閉により、尺八の音程が変化する。



長さの異なる尺八各種。上から一尺三寸、一尺六寸、一尺八寸、二尺。それぞれ違った竹の根元の曲がり具合に味わいがある。



遠藤さんは自身も、琴古流尺八の名手だ。

虚無僧が世に広げた尺八



尺八製作に用いる鑿(やすり)、鑿(のみ)、鋸(のこ)などの工具各種。



工房に所狭しと並べられた見事な尺八の数々。 工房内に飾られた可愛らしい尺八のオブジェ。

「尺八の構造はラップ同様、下に行くに従い細くなっているの

「尺八の構造はラップ同様、下に行くに従い細くなっているの

「尺八の構造はラップ同様、下に行くに従い細くなっているの

「弟子入りする際に、機械を入れてほしい」と談判したんですが、そんなものは必要ない。の一点張りですね。で、内緒で機械を買ってきたんですが、いざ使うとなると、これがなかなか難しく。正直、使いこなすまで大変でした」

「弟子入りする際に、機械を入れてほしい」と談判したんですが、そんなものは必要ない。の一点張りですね。で、内緒で機械を買ってきたんですが、いざ使うとなると、これがなかなか難しく。正直、使いこなすまで大変でした」

「弟子入りする際に、機械を入れてほしい」と談判したんですが、そんなものは必要ない。の一点張りですね。で、内緒で機械を買ってきたんですが、いざ使うとなると、これがなかなか難しく。正直、使いこなすまで大変でした」